

氏 名	山口 初代
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第 22 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造
論文審査委員	主査 教授 大湾 明美
	副査 教授 川崎 道子
	副査 教授 金城 芳秀
	副査 准教授 田場 由紀
	副査 特任教授 永島 すえみ

博 士 論 文 要 旨

保健看護学専攻 成人・老年保健看護 領域	学籍番号 328002 氏 名 山口 初代
論文題目	要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造
<p>【背景】</p> <p>働くことで人の役に立ってきた成人期を経て、衰退を体験している存在である要援護高齢者が就労を通して社会に参加することの実現は老いを生きることの支えにつながると考える。しかし、要援護高齢者が就労につながるためには、支援が必要である。そのため、経験的に試みられている実践に学び、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造を明らかにすることで、支援の道しるべになることから意義があると考ええる。</p> <p>【目的】</p> <p>要援護高齢者であっても、就労を通じて社会の構成員として参加することの実現に向け、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の実態から、支援の構造を明らかにすることである。そのために、本研究では、以下の探求の問いをかける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護予防活動の場の支援者は、高齢者の就労についてのどのような基盤となる考え方を持っているのだろうか 2. 介護予防活動の場の支援者は、要援護高齢者の行動のアセスメント、支援内容(目標・実施)、評価をどのようにしているのだろうか 3. 就労の場の支援者にどのような「つなぎ」をしているのだろうか 4. 就労の場の支援者は、「つなぎ」を受け、支援内容(目標・実施)、評価をどのようにしているのだろうか 5. 介護予防活動と就労のそれぞれの場の支援者の協働による支援のプロセスから導かれる要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造は、どのようなものだろうか <p>【方法】</p> <p>研究デザインは、質的記述的研究である。研究参加者は、ネットワークサンプリングで72施設に探索し、要援護高齢者を介護予防活動の場から就労につなげる支援が把握された介護予防活動の場 11 施設と就労の場 13 施設の 15 事例の支援者であった。研究は3つの段階で構成する。</p> <p>第1段階:介護予防活動の場の支援者に、高齢者の捉え方、高齢者ケアの実践で意識していることや大事にしていること、経験したことなどを半構造化面接で聞き取った。逐語録の内容から「要援護高齢者の就労についてどのように考えているか」との問いをかけ、質的帰納的に整理し、就労の「基盤となる考え方」を導いた。</p> <p>第2段階:介護予防活動の場の支援者と就労の場の支援者それぞれに、就労につなげた個別の支援について半構造化面接で聞き取った。逐語録の内容から支援のプロセスである「行動のアセスメント」、「支援の目標」、「支援の実施」、「支援の評価」、「つなぎ」について、事例ごとにキーセンテンス化した。次に、ロイの人間の適応システム(2009)の4つの行動のアセスメントを参考にして作成した本研究の枠組み(〔心身機能を把握し、補う〕、〔その人の“生きる”を見いだし、尊重する〕、〔他者との関係性を見いだし、支え合う〕、〔強みを活かす役割を見つけ、他者の役に立つ〕)に照らしキーセンテンスを分類し、事例ごとに個票を作成した。全事例のキーセンテ</p>	

ンスをまとめ、「介護予防活動の場の支援の特徴は何か」、「就労の場の支援の特徴は何か」との問いをかけ、質的帰納的に整理し、それぞれの支援の特徴とした。

第3段階:第2段階で導かれたそれぞれの支援の特徴から「介護予防活動を就労につなげる支援のあり方は何か」との問いをかけ、「支援のあり方」を導いた。第1段階で導かれた「基盤となる考え方」と「支援のあり方」で、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造を図式化した。

【結果】

1. 介護予防活動を経て、就労を実現した要援護高齢者の支援について、全事例に行動のアセスメントの全ての様式についての支援のプロセスがあった。

2. 要援護高齢者は、介護予防活動の場の支援を受け、就労の場につながり、就労の場の支援を受け、ボランティア活動や無償労働だけでなく、経済的対価のある有償労働があった。超高齢社会における要援護高齢者の就労は、生活機能の低下があっても、支援によって可能であるといえる。

3. 高齢者の就労についての基盤となる考え方には、【人は誰でも、人の役に立つことで、健康や生きがいを見だし、就労できる】、【高齢者から学び、ケア関係を構築し、楽しみとやりがいにする】、【地域での暮らしの継続をめざし、支えあう】が導かれた。

4. 介護予防活動の場の支援の特徴には、《高齢者を地域の資源にする支援》、《家族と関係者を活用する支援》、《地域とのつながりを断ち切らない支援》、《就労につなげる支援》の категорияがあった。

5. 就労の場の支援の特徴には、《高齢者を就労の資源にする支援》、《家族と関係者を活用する支援》、《地域で高齢者が就労する環境を整える支援》、《就労で社会とつながる支援》の категорияがあった。

6. 要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援のあり方には、【当事者を地域の資源から就労の資源にする支援】、【家族と関係者を活用する支援】、【地域とのつながりを断ち切らず、就労する環境を整える支援】、【就労につなげ、社会とつながるを支援】が導かれた。

【結論】

要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造は、基盤となる考え方を土台として、支援のあり方に影響していた。基盤となる考え方を、個人にとっても社会にとっても「あるべき姿」で志向し、社会参加の最も高いレベルの就労につなげることを意図していた。支援のあり方は、介護予防活動の場の支援者と就労の場の支援者が互いにつながり合いながら、当事者である要援護高齢者を就労につなげ社会とつながるために、家族、関係者を活用し、地域の資源を取り込み、就労する環境を整えるという支援の構造があった。

博士論文審査結果等の要旨

博士論文申請者	山口 初代
博士論文審査結果の要旨 (3000字以内)	
<p>本論文のテーマは、「要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造」である。当該学生は、小離島で6年間、地域包括支援センターの保健師の実務経験がある。実務では、主に自立高齢者が要支援・要介護状態にならないような介護予防活動（一次予防）を実践してきた。特に、高齢者の就労に着目し、野草茶を高齢者と作り、バザーで販売し、その収益金でケーキを購入し、高齢者仲間の集いの機会にするなど、高齢者の介護予防活動を就労につなげ、介護予防活動に活かす実践をしていた。</p> <p>今回の研究テーマは、保健師の実務経験を土台にしつつ、地域共生社会の実現に向けた看護教育や看護実践への活用を意図していた。「人は誰でも誰かの役に立つ」という観点から、要援護高齢者であっても、社会参加の最も高いレベルの就労が支援によって可能になるのではないか、また、その構造が明らかになれば看護職の支援の道しるべになるのではないかと疑問から研究テーマに至った。</p> <p>研究テーマに関する背景は、「就労」と「介護予防活動」をキーワードとして、国内外の文献を検討し、本学紀要に投稿した。人が働くことと労働、就労の歴史的な背景、就労の定義と類似概念を整理した後、社会的弱者に用いられるのは就労であるとし、その文献から、高齢者の就労ニーズは自己のためだけでなく他者のためもあったこと、高齢者の就労は、対価だけでなく健康づくりや生きがいづくりなどの介護予防活動になっていたこと、国外文献では、高齢者を社会的弱者の就労支援の対象にしていなかったこと、支援の方法は支援モデルは提示されているものの個別支援の必要性を示していた。国内外の就労に関する文献では、看護職の就労に関する支援は見いだせていなかった。介護予防活動に関する文献では、国内外で高齢者の介護予防活動を就労につなげる文献は見いだせないことが明らかにしていた。</p> <p>そして、我が国における少子高齢化から捉えた就労と老いと適応に関する理論を踏まえ、Royの適応看護モデルから介護予防活動を就労につなげる支援の構造を明らかにする必要性を述べていた。</p> <p>以上の背景から、本研究の目的は、要援護高齢者であっても、就労を通じて社会の構成員として参加することの実現に向け、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の実態から、支援の構造を明らかにすることとしていた。</p> <p>研究デザインは、質的記述的研究とし、看護理論家のRoyの人間の適応システムを参考にして、本研究の概念枠組みをつくっていた。介護予防活動を就労につなげている優れた実践者、つまり研究参加者の選定に多くの労力を要した。ネットワークサンプリングで要援護高齢者を支援している72施設をサンプリングし、本研究の選定基準に該当する支援者をリクルートした結果、15事例の支援者26名（看護職6名）を把握し、研究の協力を得ていた。</p> <p>データ収集・分析は3段階で構成され、第1段階は高齢者の就労についての基盤となる考え方を明らかにする、第2段階は要援護高齢者の支援のプロセスから、介護予防活動の場と就労の場の支援の特徴を明らかにする、第3段階は、支援の特徴から支援のあり方を導き、基盤となる考え方を踏まえ、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる構造を図式化することであった。</p> <p>研究結果は、高齢者の就労についての基盤となる考え方には、【人は誰でも、人の役に立つことで、健康や生きがいを見だし、就労できる】、【高齢者から学び、ケア関係を構築し、楽しみとやりがいにする</p>	

る】、【地域での暮らしの継続をめざし、支えあう】があることを明らかにした。介護予防活動の場の支援の特徴には、《高齢者を地域の資源にする支援》、《家族と関係者を活用する支援》、《地域とのつながりを断ち切らない支援》、《就労につなげる支援》があり、就労の場の支援の特徴には、《高齢者を就労の資源にする支援》、《家族と関係者を活用する支援》、《地域で高齢者が就労する環境を整える支援》、《就労で社会とつながる支援》があったことを明らかにした。そして、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援のあり方には、【当事者を地域の資源から就労の資源にする支援】、【家族と関係者を活用する支援】、【地域とのつながりを断ち切らず、就労する環境を整える支援】、【就労につなげ、社会とつながるを支援】があることを示し、基盤となる考え方を含め支援の構造を明らかにしていた。

考察は、超高齢社会における要援護高齢者の就労、要援護高齢者の就労にみる地域共生社会の具現化、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援のあり方、要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造、要援護高齢者の就労に向けた老年看護実践への提言の5つで構成していた。特筆すべきは、介護予防活動の支援を健康づくりや生きがいづくりに限定せず、就労につなげる支援にすることで、要援護高齢者の強みが活かされ、他者の役に立つことが可能になることを示し、そのための支援の構造を明らかにしたことであった。介護予防活動の支援者の基盤となる考え方は地域共生社会にあるべき姿の具現化であること、介護予防活動と就労の場の支援の特徴から支援のあり方は、当事者から家族へ、家族から関係者へ、地域から社会へと、地域を巻き込み、循環していたこと、それぞれの支援者はつながりあいながら継続していたことを支援の構造で明らかにし、構造図を示したことであった。

博士論文審査委員会における審査結果は、博士論文としてオリジナリティがあり、合格に値すると認めた。

論文の公表に際し、以下の点が指摘され、研究指導教員に継続指導が一任された。

1. 引用文献で用いた「今ある姿」と「あるべき姿」の捉え方と、ケアリングの捉え方の整合性を整理すること
2. 地域共生社会の具現化は、社会にとっての意義だけでなく高齢者にとっての意義を加筆すること
3. 老年看護実践への提言を保健師活動にも対応できるように具体的に記述すること
4. 研究の限界を丁寧に記述すること
5. その他、論文の記述方法として、文献と結果の記述順序、結論の記述順序を工夫すること